

活動成果報告書

平成25年度（第17回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

健診事後教室「親子遊び方教室」の改革 ～必要な支援を必要な家庭に～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

武豊町健康課・子育て支援課

代表者：新美 一乃

勤務先：武豊町

所 属：健康課（武豊町保健センター）

所在地：〒470-2334

愛知県知多郡武豊町字中根四丁目83番地

T E L : 0 5 6 9 - 7 2 - 2 5 0 0

F A X : 0 5 6 9 - 7 2 - 2 5 0 7

E-Mail : kenko@town.taketoyo.lg.jp



◇活動方針

武豊町では、昭和58年度より児童課（現・子育て支援課）と共催で、1歳6か月児から3歳児健診での発達要観察児を対象とした健診事後教室「親子遊び方教室」（以下「教室」）を開催してきた。近年、子育て支援課管轄の子育て支援センターや町立保育園との連携が密になり、要観察児をとりまく環境は充実し、支援体制の整備は進んできた。

一方で、関係機関からこの教室への質の向上が期待されることとなり、対象児の変化、とりわけ教室勸奨児の増加や勸奨理由の多様化と相まって、従来の教室体制では十分な支援が行えない現状が明らかになってきた。

そこで、子育て支援・発達支援にかかわる町内の関係機関と協議し、必要な対象者に必要な支援がより届きやすい実施体制について検討した上で、教室を実施することとした。

◇活動内容

【従来の教室の問題点】

この教室は、町内の就園前の親子にとって、親子で利用できる事後教室としては唯一のものであった。そのため、1歳6か月健診事後、3歳児健診事後と年齢が異なる対象児に、同じ活動プログラムを実施しており、参加児の発達課題に応じた教室の展開ができなかった。また、参加人数が増えてくると就園に近い3歳児の参加を優先することになり、低年齢児の参加を先延ばしにせざるを得なかった。そのため、必要な時期に必要な支援の機会を提供できないケースがあった。

活動成果報告書

【24年度からの教室展開】

前述の問題点を解決し、より効果的な支援が展開できるよう、対象児の年齢別に2つの教室に区分し、名称を「びっぴ」・「こっこ」とした。それぞれの違いは(表1)の通りである。

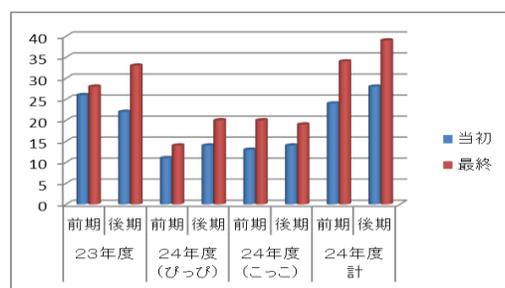
(表1) 平成24年度からの教室展開

	親子遊び方教室「びっぴ」	親子遊び方教室「こっこ」
対象年齢	就園2年前の年齢の児(1歳児) 1歳6か月児健診、2歳児健診で要継続支援にあがった親子のうち、教室が必要な者	就園1年前の児(2歳児) 2歳児健診、3歳児健診で要継続支援にあがった親子のうち、教室が必要な者
参加児の フォー内容	運動発達、社会性、言語発達、情緒、養育環境など全て	運動発達、社会性、言語発達、情緒、養育環境など全て
開催頻度	2クール/年 月2回 1クール約10回	2クール/年 月2回 1クール約10回
スタッフ (人)	指導保育士：1 保育士(町内保育園、子育て支援センター)：3 児童館厚生員：2 子育て支援課保健師：1 療育施設主任保育士：1(必要時) 健康課保健師：2	指導保育士：1 保育士(町内保育園、子育て支援センター)：3 児童館厚生員：4 子育て支援課保健師：1 療育施設主任保育士：1(必要時) 健康課保健師：2
教室運営の 特徴	活動は、親子が手をつないで走ったり、母親がゴールになって走ってくる児を抱きしめたりする「よーいどん」を主とし、母子の愛着形成に努めた。従前の教室では、毎回活動内容を変え、親子が飽きないようにしていたが、「びっぴ」では活動内容を変えず、同じ経験を重ねることで、成功体験を積み上げ、自信をつけられるようにした。	就園を視野に入れ、順番を待つことができる活動内容を、意図的に主活動の中に盛り込んだ。また、町立保育園にて給食を食べる日を設け、保育園での活動体験をした。 後期は2月までの開催とし、就園前の保育園行事に参加しやすいように工夫した。

【実績】

●参加実人数

(図2) 参加実人数の比較



平成23年度の参加実人数は、最終回で見てみると、前期で28人、後期で33人の、年度合計61人であった。

平成24年度は、同じく最終回で比較してみると、「びっぴ」前期で14人、後期で20人の計34人。「こっこ」は前期で20人、後期で19人の計39人で、年度合計73人であった。

平成23年度と平成24年度の「びっぴ」・「こっこ」の合計数と比

較すると、平成24年度の方が12人多かった。このように、教室を分けたことにより、この教室で支援できる児を全体で増やすことができた。なお、参加当初より最終の人数が増えているのは、教室開始後、健診時などで随時勧奨し、途中から参加する児がいるためである。

●参加児の年齢構成

参加児の参加当初の年齢構成は、(表3)のとおりである。年齢別に教室を分けたことで、教室での参加児の年齢差が縮まった。これにより、発達課題に合わせた活動が展開できた。さらに、活動の中で、親に活動のねらいや見てもらうポイントを伝えているが、年齢が近いことで、発達に合わせた内容に設定できるようになり、親にも理解しやすいものになった。

活動成果報告書

(表3) 参加月齢の比較

(単位：か月)

	23年度		24年度(びっぴ)		24年度(こっこ)	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
最小値	12	18	15	19	25	32
最大値	35	45	23	29	36	42
平均値	28.71	29.56	21.57	26.10	32.15	38.16
月齢差	23	27	8	10	11	10

●参加児のフォロー内容

参加児のフォロー内容を、「運動発達」・「社会性」・「言語」・「情緒」・「養育環境」の5分類(重複あり)に分けて比較した。図3は、全て後期の分類である。

図3-1 フォロー内容

(23年度)

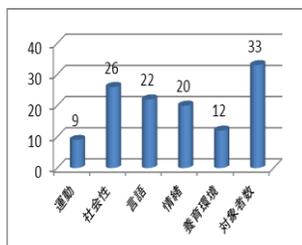


図3-2 フォロー内容

(24年度「びっぴ」)

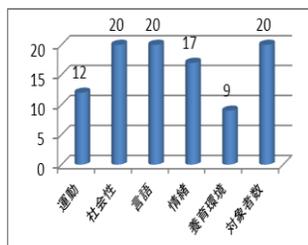
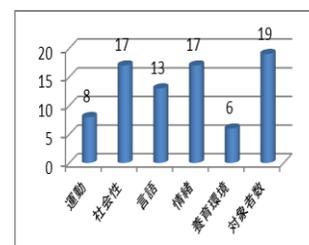


図3-3 フォロー内容

(24年度「こっこ」)



どの回も、「社会性」・「情緒」・「言語発達」に支援を必要とする児が多かった。また「びっぴ」では、他と比べて「運動発達」で要支援となる児(例：未歩行)が多い特徴が見られ、今後もプログラムを検討する上で考慮する必要があることが分かった。また、「びっぴ」を開催したことで、低年齢から多くの支援が必要な児に、早期からの支援が可能になった。

◇今後の計画

教室の見直しを検討していた平成24年4月に、町内で二つ目の子育て支援センターが開館した。今回は、教室を見直すと同時に、子育て支援センター主催の発達支援事業や児童館・保育園の事業との連携を検討し、町全体の子育て・発達支援事業が、切れ目なくつながっていくように検討していった。24年度は、町全体の子育て支援事業の改革期だったともいえる。その際、必ず関係機関のスタッフが顔を合わせて、直接意見交換をするようにしてきた。

また、教室には町立の療育施設の保育士も介入しており、療育的な視点からのアプローチを、同じ場面を見ながら共に考えることができている。そして、23年度には7名、24年度には5名が、この教室から町立療育施設の通園に移行した。施設移行後も、従前から保健師が定期的に施設訪問し、児の発達や親の健康相談、保育士との情報交換を行っている。このような連携も、教室から通園の移行がスムーズに行えている理由であると考えられる。

こうした、課や職種をまたいだスタッフの強い連携が、武豊町の子育て支援の強みであると実感した。

今回の見直しで、必要な親子に早期からの支援が実践できる受け皿ができた。だが一方で、教室参加児は、継続的な支援を必要とする場合が多いので、クールをまたぐ(継続する)ケースが多い。そのため特に、後期開催時点での「こっこ」が継続児でほぼ定員を満たしてしまい、新規参加者の受け入れが難しくなってしまった。そこで平成25年度後期からは、「こっこ」をさらに生年月日別の2グループにして実施している。2グループに分けたことで、3歳児健診での姿を親と保健師で共有しながら教室を勧奨してスムーズに参加につながったり、保育園から入園面接での児の様子が気になると連絡がきたりした親子にも教室に参加してもらうための受け皿ができた。今回の見直しで終わることなく、今後も武豊町全体の就園前の子育て支援体制のあり方について、関係機関と顔が見える関係を保ちながら、更なる改善・改革をすすめていきたい。

以上